

# 臨終行儀の音・音楽の再現に関する研究 —各地二十五菩薩来迎会の比較調査—

伏 見 強 安 本 義 正

二十五菩薩来迎会は、極楽浄土への人々の願いを具現化した「迎え講」を原点にし、1,000年以上の歴史を有する。筆者らは、臨終行儀の音・音楽の再現を目的に、現在も練供養として継承してきた5ヶ寺で現地調査を実施し、関連分野で活躍する専門家に取材した。また、本学で文化公演会（講演・実演）を開催し、来迎引接の核心を実演によって確認した。各寺で行われている練供養の類似点と相違点を中心に検証する。

キーワード：二十五菩薩来迎、練供養、楽器、中将姫、曼陀羅

## 1. はじめに

心豊かな生とともに、安らかな死は人類永遠のテーマである。人類は科学技術の進歩による物質的な豊かさを手に入れたが、一方で、心の問題としての生死の文化を失ってきたように思われる。最近、音楽療法の分野で、「日本の文化土壌に根ざした音楽療法」が話題になっているが、日本のターミナル・ケアの原点とも言える「臨終行儀」はまさに「日本の文化土壌に根ざした音楽療法」そのものとも言える。

この臨終行儀に関する研究は、これまで多くの研究者によって行われてきたが、二十五菩薩来迎に関しては楽器を携えている菩薩がどのような音楽を奏でていたのかなど、具体的な記述はあまりなく、全国各地で執り行われている「二十五菩薩練供養」等において用いられる音や演奏される音楽（雅楽等）に垣間見られる程度である。

筆者らは、これまでに各種高齢者施設等における音楽活動（音楽療法を含む）に関して、ア

ンケート調査等<sup>1)2)</sup>を行ったが、ほとんどの施設で高齢者の健康維持・増進を目的とした音楽活動を取り入れていることがわかった。音楽活動の作用・効果についての理解も深まっていることが推察される。さらに、高齢者施設における音楽療法の実践においても、音楽活動の作用・効用を実感している。

本研究では、死の看取りに関して、仏教における臨終行儀に着目して、その中で用いられる音・音楽についての調査研究を基にして二十五菩薩が奏でる音・音楽の再現を試み、本学の仏教精神に基づく人間教育に資するとともに、ターミナル・ケア等の社会活動に役立てることを目的とした。そのために、臨終行儀に関する仏教的・歴史的・文化的背景の把握から始め、全国各地で執り行われている二十五菩薩練供養の内、5ヶ寺で現地調査を実施し、関連分野で活躍する専門家への取材を行った。

最終目標としていた「音・音楽の再現」には至らなかったものの、本学同唱館において文化公演会（講演&実演）「當麻寺練供養会式（二十五菩薩来迎会）」を開催し、當麻寺二十五菩薩練

供養の核心部分を再現することができた。

以下、當麻寺、誕生寺、弘法寺、泉涌寺即成院、大念仏寺の順に、各寺院の練供養について、菩薩の順番や特徴・特色等を比較し、本学で実施した前述の文化公演会より、中将姫と當麻曼陀羅及び同寺の二十五菩薩来迎の実演を検証する。

## 2. 各寺院の練供養の特色・特徴

### 1) 當麻寺の練供養（奈良県葛城市）

當麻寺練供養会式（二十五菩薩来迎会）は、中将姫の命日5月14日、境内に東西約120m幅1.5mの橋を特設して行われる。人々が見守る中、西方極楽浄土とされる曼陀羅堂から人間世界の娑婆堂まで二十五菩薩が列を成す。観音菩薩が独特のしぐさで蓮台に乗せた中将姫を左右に捧げ持ち、夕日に染まり始めた曼陀羅堂へ厳かにゆっくりと練り帰る。極楽浄土を彷彿とさせる當麻寺の練供養は平安時代に始まり、1,000年を越える歴史がある。

人々の雑踏の中、僧と子ども2名の先導に続き、4人の担ぎ手によって中将姫像が鎮座する神輿が本堂より娑婆堂へと特設された橋を渡る。次に、雅楽「越天楽」に合わせて、和服正装の女性たちに手を引かれた稚児の行列に続き、僧侶、地藏菩薩に先導されて、右側に介添え者を従えた二十五菩薩が橋を渡り、娑婆堂を目指す。（図1）



図1. 當麻寺曼陀羅堂から娑婆堂に向かう二十五菩薩

最後に、蓮台を捧げ持つ観音菩薩、合掌の勢至菩薩、天蓋を持つ普賢菩薩が一步進んで半歩下がる独特の歩みで娑婆堂を目指す。この間、僧侶たちによる読経が続く。

娑婆堂では来迎和讃に合わせて、安置された中将姫像が導師から観音菩薩の蓮台に移され、勢至菩薩が優しく清める。

娑婆堂でのこの儀式が本練供養のハイライトであるが、娑婆堂のスペースはそう広くはなく、周囲を二十五菩薩が取り巻いていることから、一般の大衆が目の辺りにすることは稀である。

娑婆堂から本堂への復路は、般若心経からいつしか喜多郎のシンセサイザー音楽に変わる。本堂の伽藍に夕陽がかかる頃、中将姫像を載せた蓮台を捧げ持つ観音菩薩がゆっくりと本堂を目指す。合掌の勢至菩薩、天蓋を持つ普賢菩薩の後に、その他の菩薩が続き、僧と子ども二人と空になった神輿が行列の最後尾を飾る。<sup>3)</sup>

娑婆堂での儀式については、2009年11月、本学同唱館における文化公演会（講演&実演）「當麻寺練供養会式（二十五菩薩来迎会）」で実演した。この様子は、**3. 3) 二十五菩薩来迎**で詳述する。

### 2) 誕生寺の練供養（岡山県久米南町）

誕生寺は、1193年、法然上人生誕の屋敷跡に

建立される。父・漆間時国公は地域の治安維持を司った武士であった。誕生寺の練供養は、浄土宗宗祖・法然上人の両親の追恩法要として平安後期に始まり、法然上人の父母を隔年で供養する。父の命日の旧暦3月19日・新暦4月19日に行われてきたが、近年は4月の第3日曜日に定着している。

本堂で法要が行われる頃から二十五菩薩に扮する信徒や肉親などの介添え者の着替えも始められる。15時より、極楽浄土に見立てた本堂を起点に、およそ300m東に位置する参道沿いの娑婆堂までを舞台として練供養が開始される。けがれなく、人の世に現れた仏と考えられている天童や稚児などに続いて、地藏菩薩を先頭に二十五菩薩が本堂を出発する。各菩薩は所定の楽器を携え行列し、娑婆堂前の浄土と現世を繋ぐ来迎橋を渡る。娑婆堂では、法然上人のご両親追恩の読経後、導師がここに安置された漆間時国公像（隔年で父母が交替、偶数年が父）を蓮台に乗せ、来迎橋の向こうで待つ鳳輦に移される。行列が練り歩く場所は、本堂とその真東に位置する娑婆堂までの参道（図2）であり、山里は龍笛や笙、箏、銅鑼、読経などの厳粛かつ荘厳な響きに包まれる。沿道は参列者で賑わい、僧侶が差し出す扇子に挟まれた散華を合



図2. 娑婆堂から誕生寺本堂に帰る二十五菩薩

掌しながら有難くいただく。行列が境内に戻ると、参列者は菩薩とともに、お勤めの喜びを分かち合う。<sup>4)</sup>

### 3) 弘法寺の<sup>ねり</sup>跣供養（岡山県瀬戸内市）

弘法寺の練供養は「跣供養」と跣の字を用いる。

昭和42年までは、参道を上がった正面に本堂、その北（右手）に普賢堂が廊下でつながり、多宝塔もその伽藍を誇っていたが、同年の大火によってこれらは焼失する。本堂南側の一段高い場所にある御影堂と常行堂、経堂は消失を免れた。阿弥陀如来座像を本尊とする御影堂には、阿弥陀如来立像（迎え仏）も安置されている。

昭和42年までは、山上伽藍のあった多宝塔から経蔵までの間に行道橋が設置され、そこを二十五菩薩が練り歩いた。

弘法寺の練供養は大火の後、中断されていたが、平成9年に復活した。復興後は、舞台を山麓に移し、遍明院と東寿院が隔年で行事坊を務め、千手山弘法寺跣供養推進協議会と協力して実施されている。

5月5日14時より行事坊の本堂で、僧侶と女子中学生20数名の稚児によって、<sup>うにょぎょうどう</sup>右繞行道と呼ばれる<sup>りしゅざんまい</sup>理趣三昧法要が雅楽の演奏に乗せて行われる。その後、中将姫像（図3）が導師によ



図3. 遍明院に安置されている中将姫像

って娑婆に運ばれ、僧侶、稚児、面をつけた聖衆らの一行も娑婆に向かう。隊列は錫杖を持った警護役の棒付きを先頭に稚児、銅鑼を鳴らす人、鏡鉞（シンバル）を鳴らす僧の後、僧侶と稚児が集団で続く。その後ろに玉幡を持った本稚児と天童が列を成し、地藏菩薩と観音菩薩6名が続く。菩薩等の介添え役に袴姿の世話役が加わり、総勢70余名の長い隊列となる。

行道は二列縦隊で錫杖と法螺貝の音で進み、銅鑼も加わり、鏡鉞の合図で止まる。途中で僧侶が和讃を唱える。

中将姫像が導師から表観音を経由して裏観音の持つ連台に奉安され、来迎引接の儀式が終わる。再び、来た時と同様の隊列を組み、千手出身の男性が入った阿弥陀如来立像（迎え仏）が待つ他方の寺の本堂へと進む。一行が浄土に見立てた本堂に入った後、最後に両脇の介添え者と共に阿弥陀如来立像が本堂に姿を消す。散華が宙を舞い、笙・箏・龍笛の音が響く中、幕を閉じる。<sup>5)</sup>

#### 4) 泉涌寺即成院の練供養（京都市東山区）

即成院は、1902年泉涌寺塔頭として泉涌寺の総門前北側に再興された。即成院内陣には、現世の極楽浄土ともよばれる重要文化財の本尊・



図4. 即成院本堂から地藏堂に向かう大地蔵菩薩と観世音菩



図5. 即成院本堂から大地蔵菩薩と観世音菩薩に続く他の二十五菩薩

木造阿弥陀初来坐像を中心に観音菩薩、勢至菩薩以下全二十五菩薩坐像も揃って安置されており、仏像で現存する例は他にない。

即成院では、毎年10月第3日曜日に二十五菩薩練供養が御詠歌講の来迎和讃にあわせて行なわれる。極楽浄土とされる本堂から現世に見立てた地藏堂まで長さ50<sup>メートル</sup>、高さ2<sup>メートル</sup>の橋が特設され、地元の信徒などの子どもら25名が金色の面と煌びやかな衣装で扮し、大地蔵菩薩を先頭（図4）に観世音菩薩、勢至菩薩、その他の二十五菩薩が続く。（図5）雅楽の調べが流れる中、観世音菩薩は大きくゆったりと身体を揺らして舞い、その後にその他の菩薩が龍笛や鼓、笙、箏等の楽器や玉幡などを持って続く。<sup>6)</sup>

#### 5) 大念佛寺の練供養（大阪市平野区）

毎年、5月1～5日までの5日間、総本山大念佛寺において「二十五菩薩 聖衆来迎阿弥陀教万部法要」が行われる。大念佛寺の練供養は、僧侶による二十五菩薩来迎の儀式と併せて、一万巻の「阿弥陀教」が唱えられることから、「万部お練り」と呼ばれ、ご先祖の法恩追善と世界平和、人類の幸福を祈念する法要とされる。

「万部おねり」とは、聖聚来迎会と阿弥陀経万部会が融合された融通念佛宗総本山大念佛寺最大の伝統行事の通称名である。聖聚来迎会は



無量寿経の中の「その人、寿（いのち）が終わる時にあたって、極楽浄土から二十五菩薩を従えて、その人を迎えに来るであろう」という阿弥陀仏の願いを具体的に表現した儀式であり、1349年3月15日「観音様の蓮台に乗り、阿弥陀如来のお導きに従って、生身のまま往生の本懐を遂げるまでの儀式を営んでみたい。聖聚来迎の様相を実際にこの眼で見、また世の多くの人々にも見ていただきたいものだ」と中祖法明上人自ら行者となり、臨終不退、一念往生、上品上生を遂げるまでの法明上人の堅固な意思により始まったとされる。

「阿弥陀経万部会」は江戸時代第49世堯海上人の頃、「阿弥陀経を一万部読誦して、極楽往生と檀信徒の先祖供養」を願いとしてはじめられた。

本堂の南側と東側に練り回廊が特設され、踊躍念仏、六斎念仏、稚児の行列、奠茶供華、

詠讃歌舞などに続き、お清めの洒水僧<sup>しやすいそう</sup>、を先頭に、専門の僧が扮した菩薩が練りだし、ご本尊天得阿弥陀如来、大導師、紫金職、大衆と続き極楽絵巻（図6）が展開される。<sup>7)</sup>



図6. 大念佛寺本堂に向かう観世音菩薩（左）と勢至菩薩

筆者らが訪問した平成20年の練供養の各種奉納日程及び時間割は表1のとおりであった。

表1 大念佛寺の練供養各種奉納日程及び時間割（平成20年）

	5月1日	5月2日	5月3日	5月4日	5月5日
6:30～7:30	半斎勤行	半斎勤行	半斎勤行	半斎勤行	半斎勤行
10:00	おつとめ	おつとめ	おつとめ	おつとめ	おつとめ
10:30					コーラス奉納聖歌隊
11:00	八島念仏講	大念佛寺奉賛会 物故者追善法要	融通声明 コンサートの集い	雅のハーモニー 融通念仏宗楽融 会	布教
11:30	安堵念仏講	コーラス奉納聖歌 隊	融通声明研究会 他		総長あいさつ 魚山流詠讃歌舞 奉納
12:00	布教	布教	布教	布教	布教
13:00	総長あいさつ	二十五菩薩練供 養入御	総長あいさつ	二十五菩薩練供 養入御	二十五菩薩練供 養入御
13:10	二十五菩薩練供 養入御		二十五菩薩練供 養入御		
14:00	おつとめ	おつとめ	おつとめ	おつとめ	おつとめ
15:00	二十五菩薩練供 養入御	二十五菩薩練供 養入御	二十五菩薩練供 養入御	二十五菩薩練供 養入御	二十五菩薩練供 養入御
15:30	終了	終了	終了	終了	終了
献花献茶	吉村社中	高松社中	淡交会社中	尾田社中	中島社中

この「万部法要」は平成14年より大阪市の無形民俗文化財に指定されている。

# 6) 二十五菩薩の練順

練供養における二十五菩薩の順番は各寺院で若干異なる。本研究対象5ヶ寺の練順は表2のとおりであった。菩薩の名前も寺院によって若干異なる。例えば、地藏菩薩と大地蔵菩薩、日

照菩薩と日照王菩薩、勢至菩薩と大勢至菩薩、自在王菩薩と定自在菩薩などである。

なお、弘法寺については、資料に基づいて當麻寺に準じて並べたものであり、確定的ではない。

表2 二十五菩薩の練順

	當麻寺	誕生寺	弘法寺	泉涌寺即成院	大念仏寺
1	觀世音菩薩	地藏菩薩	觀世音菩薩	大地蔵菩薩	觀世音菩薩
2	大勢至菩薩	觀世音菩薩	大勢至菩薩	觀世音菩薩	勢至菩薩
3	藥王菩薩	大勢至菩薩	藥王菩薩	大勢至菩薩	藥王菩薩
4	藥上菩薩	藥王菩薩	藥上菩薩	藥王菩薩	藥上菩薩
5	普賢菩薩	藥上菩薩	普賢菩薩	藥上菩薩	普賢菩薩
6	法自在菩薩	普賢菩薩	法自在菩薩	普賢菩薩	金蔵菩薩
7	獅子吼菩薩	法自在菩薩	獅子吼菩薩	法自在菩薩	獅子吼菩薩
8	陀羅尼菩薩	獅子吼菩薩	陀羅尼菩薩	獅子吼菩薩	華嚴王菩薩
9	虚空蔵菩薩	陀羅尼菩薩	虚空蔵菩薩	陀羅尼菩薩	虚空蔵菩薩
10	徳蔵菩薩	虚空蔵菩薩	徳蔵菩薩	虚空蔵菩薩	徳蔵菩薩
11	宝蔵菩薩	徳蔵菩薩	宝蔵菩薩	徳蔵菩薩	寶蔵菩薩
12	金蔵菩薩	宝蔵菩薩	金蔵菩薩	宝蔵菩薩	法自在菩薩
13	金剛蔵菩薩	金蔵菩薩	金剛蔵菩薩	金蔵菩薩	金剛蔵菩薩
14	山海恵菩薩	金剛蔵菩薩	山海恵菩薩	金剛蔵菩薩	山海慧菩薩
15	光明王菩薩	山海慧菩薩	光明王菩薩	山海恵菩薩	光明王菩薩
16	華嚴王菩薩	光明王菩薩	華嚴王菩薩	光明王菩薩	陀羅尼菩薩
17	衆宝王菩薩	華嚴王菩薩	衆宝王菩薩	華嚴王菩薩	衆宝王菩薩
18	月光王菩薩	衆宝王菩薩	月光王菩薩	衆寶王菩薩	日照王菩薩
19	日照王菩薩	月光王菩薩	日照王菩薩	月光王菩薩	月光王菩薩
20	三昧王菩薩	日照菩薩	三昧王菩薩	日照王菩薩	定自在王菩薩
21	定自在王菩薩	三昧王菩薩	定自在王菩薩	三昧王菩薩	三昧王菩薩
22	大自在王菩薩	自在王菩薩	大自在王菩薩	定自在王菩薩	大自在王菩薩
23	白象菩薩	大自在王菩薩	白象菩薩	大自在王菩薩	白象王菩薩
24	大威徳王菩薩	白象王菩薩	大威徳王菩薩	白象王菩薩	大威徳王菩薩
25	無辺身菩薩	大威徳王菩薩	無辺身菩薩	大威徳王菩薩	無辺身菩薩
26	地藏菩薩	無辺身菩薩	地藏菩薩	無辺身菩薩	

## 7) 二十五菩薩練供養会式の概要

式の概要は、表3のとおりである。

筆者らが取材した各寺の二十五菩薩練供養会

表3 各寺院の二十五菩薩練供養会式の概要

寺院	當麻寺	誕生寺	弘法寺	泉涌寺即成院	大念仏寺
所在地	奈良県葛城市	岡山県久米南町	岡山県瀬戸内市	京都市東山区	大阪市平野区
名称	當麻寺練供養会式 (二十五菩薩来迎会)	円光大師御両親追恩 二十五菩薩迎接練供養 法会	千手山弘法寺跏趺供養	二十五菩お練り供養法 要会	二十五菩薩聖聚来迎阿 弥陀經万部法要
通称	當麻寺のおねり	誕生寺の練供養	跏趺供養	二十五菩お練り	万部おねり
日時	5月14日 午後4時～ 中将姫命日	4月第3日曜日	5月5日 午後2時～	10月第3日曜日 午後 1時～	5月1～5日
起源 経過	平安時代、恵心僧都が 二十五菩薩の面と装束 を寄進したことに始ま る	室町時代より始まる	阿弥陀如来の洞内に は、永仁四年(1296) の銘あり、鎌倉時代に 始まる。昭和42年、大 火により中断 平成9 年復活	平安時代より始まる	1349年、中祖法明上人 の堅固な意思により始 まり、阿弥陀經万部会 は江戸時代第49世堯海 上人の頃に始まる
文化 財等		岡山県無形文化財	岡山県指定重要無形民 俗文化財		大阪市指定文化財
宗派	真言宗 浄土宗	浄土宗	真言宗	真言宗泉涌寺派	融通念仏宗
行道	曼陀羅堂(本堂)から 仁王門近くの娑婆堂ま で、境内に長さ120m 幅1.5m高さ2mの橋を 特設	本堂を極楽浄土に、山 門手前250 <sup>㍎</sup> にある六 地藏の祀られている飛 び境内を娑婆堂に見立 てる	山側の遍明院と下手の 東寿院が隔年で交互 に極楽浄土と娑婆堂を 分担し、両寺の参道約 300 <sup>㍎</sup> が舞台	本堂を極楽浄土、地藏 堂を現世に見立て、そ の間に長さ50m高さ2 mの橋を特設	本堂の南側から東側の 回廊に沿ってL字型の 橋を特設
法要の 概要	極楽浄土とされる曼陀 羅堂から観音菩薩を先 頭に二十五菩薩が続く 娑婆堂で観音菩薩の捧 げ持つ蓮台に中将姫像 が移され、極楽浄土へ と再び練り帰る	浄土宗門主導師のもと 二十五菩薩の来迎によ って上人の御両親をお 浄土へお迎えするとい う荘厳かつ厳粛な儀式 浄土宗門徒のほか病氣 平癒、無苦往生を願う 人々で賑わう	阿弥陀仏が極楽浄土か らこの世へ死者を迎え に来る「迎え講」の浄 土信仰をもとに、六観 音が中将姫を極楽浄土 に導く 行事坊の本堂前で「迎 え仏」が行列の到着を 待つ	1回目の鐘の音で稚児 たちが橋を渡りはじ め、2回目の鐘で金襴 の衣装と面で菩薩に扮 した子どもたち25名が ゆっくりと橋を渡る。 その後、本堂で御詠歌 講の来迎和讃にあわせ て観音菩薩と勢至菩薩 が舞う	二十五菩薩、本尊十一 尊天得如来の渡御を中 心に、稚児行列、献花 献茶など、橋を渡って 本堂正面へ入堂するも ので、極楽浄土に往生 する様子を現している
被供養	中将姫	法然上人父・母隔年	中将姫	民衆	極楽往生と檀信徒の追 善
特記 事項	1000年を越える伝統 菩薩の顔(面)が一体 一体で異なる	法然上人生誕の寺 二十五菩薩揃いの冠と 衣装	阿弥陀如来立像(迎え 仏) 檜材、頭体共木	阿弥陀如来の化身であ る大地蔵菩薩が先頭を きる	5日間連続して実施さ れる
菩薩 稚児	檀家、一般公募	一般公募	地域の人々	信徒の子どもたち、6 ～24歳男女	僧侶

表3から次のようなことが判る。

平安時代に広まった末法思想は、鎌倉・室町時代を通してさらに広がりを見せ、それと共に阿弥陀仏や菩薩を中心とした浄土教信仰が支配的になった。同時に、人々の臨終後の理想郷として極楽浄土が捉えられ、「迎え講」として全国的な広がりを見せた。

古くから、阿弥陀如来を中心に観音・勢至菩薩以下多数の菩薩が取り巻く極楽浄土の世界は図や絵に残されてきており、その代表的なものが當麻曼陀羅である。また、即成院のように仏像でそれを表したものもある。これらの静止した浄土の世界を音や音楽も伴って立体的に表現したのが二十五菩薩練供養である。誰しにも必ず訪れる死後の未知なる世界が、極楽浄土のように妙なる音と音楽で癒され、美しい花々や香しい香りで満ち溢れた場所であって欲しい。こうした安息の場を求める気持ちは昔も今も変わらない。このことが1,000年の時を越えて現在まで継承されてきた要因であろう。

極楽浄土の世界を目に見える形にしたのが中将姫で、彼女は當麻曼陀羅を制作した。二十五菩薩練供養はこの曼陀羅に描かれたものを劇化したもので、中将姫の業績を称えることに始まる。また、當麻寺から日本国中に拡がりを見せる中で、極楽往生と檀信徒の追善を願う大念仏寺や法然上人のご両親をまつる誕生寺のような新たな形も生まれた。根本的には、参加するすべての人々の浄土へのあこがれが原点になっているように思われる。

共通点としては、面と衣装を着けて二十五菩薩が極楽浄土から娑婆堂に来迎し、丁重な行儀の後、被供養者を伴って再び極楽浄土に帰って行く。多くの寺院では境内などに行道が特設されるが、誕生寺のように参道が行道を兼ねるところもある。但し、この場合も、境内には短い

行道が特設されている。

このように、多くの共通点を持つものの、細部では、各寺の伝統や事情により変化してきたことが窺える。

### 3. 文化公演会（講演&実演）「當麻寺練供養会式（二十五菩薩来迎会）」

2010年度の京都文教講座のテーマは「生と死を考える」であった。現代社会における「生と死を考える」きっかけになることを願って、本研究の一環として、奈良県葛城市の當麻寺奥院、川中光教住職を講師に迎え、平成21年10月31日、指月祭初日の午前11時より、本学同唱館において実演を含む文化公演会「當麻寺練供養会式（二十五菩薩来迎会）」を開催した。

#### 1) 當麻曼陀羅（図7）



図7. 文化公演でスクリーンに映された當麻曼陀羅

當麻曼陀羅は1,250年前に中将姫によって織られた4メートル四方の織物である。この曼陀羅は、浄土宗が用いている観無量寿經に基づいており、蓮糸の綴織りの手法で、極楽浄土の有様が分かりやすく織られている。ここには約600の仏が描かれていて、中央に阿弥陀三尊（阿弥陀如来を中心に、向かって右に観世音菩薩、左



側に勢至菩薩）が配置されている。その周りで37の仏が阿弥陀如来の説教を聞いていて、上方には仏の住む宮殿と雲に乗った仏が極楽に飛んで来る姿も見られる。ところどころに楽器も散りばめられており、雅楽などの楽の音も聞こえていることが窺える。阿弥陀三尊の前方、やや下方に宝池が黄色く描かれて、池の中には蓮が咲いており、極楽の入り口を示している。ここは上品上生から下品下生まで各々上中下の9段階に分かれていて、極楽での出生場所もこの世での徳によって決まるという。

このように、難しい経を読まなくても一目で極楽の様子が分かるので、文字の読めなかった人々が多い時代には便利で、親しみを持って迎えられたことが推測できる。<sup>8)</sup>

この當麻曼陀羅が一般に普及し、當麻寺が浄土信仰の霊場となる上で大きな役割を果たしたのが、浄土宗開祖法然上人の弟子・證空であった。證空上人（鎌倉時代）は本堂に安置されている當麻曼陀羅に深く帰依して『當麻曼陀羅注』を著した。やがて全国に浄土信仰が広がっていく。<sup>9)</sup>

## 2) 中将姫

當麻曼陀羅の制作者・中将姫は、大化の改新の立役者、藤原鎌足の4代後に右大臣になった藤原豊成の娘である。5歳で母親を亡くし、やがて権力争いの末に命を狙われる。山奥にかくまわれていた中将姫に再開を果たした豊成は中将姫を當麻寺に出家させる。當麻寺での中将姫は、人々が楽しく生活できる理想郷を求めて苦悩する。

波乱に満ちた中将姫の伝記はやがて浄瑠璃や謡曲になり、能や文楽の人形劇でも演じられ有名になった。<sup>10)</sup>

## 3) 二十五菩薩来迎

二十五菩薩来迎会の核心は娑婆堂での行儀にあるが、橋を渡り終えた二十五菩薩や浄土宗の僧侶が所定の位置について回向しており、一般の参拝者がこれを目にすることは滅多にない。



図8. 護念院住職の和讃にあわせて来迎する観音・勢至菩薩

本文化公演会では本学同唱館のステージを娑婆堂に見立てて、観音菩薩と勢至菩薩による練供養のハイライト場面が実演された。

観音菩薩と勢至菩薩が上手奥より来迎（図8）し、法輪の前机に安置されている中将姫像を川中住職が観音菩薩の持つ蓮台に移す。そして、観音菩薩が捧げ持つ蓮台上の中将姫像の頭を勢至菩薩が智慧の手を差し伸べてなでる。（図9）



図9. 中将姫像に勢至菩薩が智慧の手を差し伸べる

これら一連のしぐさの後、観音菩薩と勢至菩薩は下手奥を通して西方浄土に中将姫像を導い

ていった。(図10)



図10. 中将姫像を西方浄土へ迎える観音菩薩と勢至菩薩

これまで門外不出とされていた面と衣装を身につけ、毎年のように実演されている山田裕清、下村雅英の両氏が観音菩薩と勢至菩薩を演じた。

また、當麻寺護念院葛本雅崇住職によって次の来迎和讃が唱えられた。<sup>11)</sup>

「摂取不捨の光明は 念ずる所を照らすなり  
観音勢至の来迎は 声を尋ねて迎ふなり と  
きに大悲 観世音 漸く歩みちかづきて 紫磨  
黄金の身をまげて 蓮台傾け寄せ給ふ 次には  
勢至大菩薩 聖衆同時に讃嘆し 大定智慧の手  
を延て 行者の頭を撫で給ふ ついに引接し給  
ひて 金蓮台にのせ給ふ 輪廻生死のふるき里  
此時ながく隔たりぬ 即ち金蓮台に乗り 仏  
の後に随がひて」<sup>12)</sup>

#### 4. おわりに

本研究では、死の看取りに関して、仏教における臨終行儀に着目して、仏教的、歴史的、文化的な思想等について把握することから始め、関連分野で活躍する専門家への取材を行った。そのまとめとして、本学同唱館において文化公演会（講演＆実演）「當麻寺練供養会式（二十五

菩薩来迎会）」を開催し、當麻寺二十五菩薩練り供養の核心部分を仔細に観察することができた。

一方、全国各地で執り行われている二十五菩薩練供養で用いられる音・音楽についてのさらなる調査研究や二十五菩薩が携えている楽器の時代考証、二十五菩薩が奏でる音・音楽の再現及び音楽演奏を伴う臨終行儀の再現は、今後の研究を待たねばならない。

しかし、調査・研究を行ったすべての練供養において、二十五菩薩の多くが笙、箏、龍笛、箏など雅楽で使用されてきた楽器を携えているほか、錫杖や銅鑼、鐃鈸（シンバル）等の和式打楽器類が重要な役割を果たしていた。

音楽に関する記述はほとんど見当たらなかったものの、練供養において最も重要な場面となる観音菩薩並びに勢至菩薩の動作が来迎和讃に則っており、器楽と同様に声楽も重視されてきたことを確認できたことは大きな収穫である。

末尾ながら取材に応じていただいた関係各位、並びに写真掲載許可をいただいた各寺院に謝辞を述べて稿を閉じる。本研究は、本学の特別研究費によるものである。

#### 参考文献

- 1) 宮島幸子、安本義正、高齢者施設の音楽活動・音楽療法実施状況について—音楽療法士養成に関する基礎データ収集：滋賀県の場合、一近畿音楽療法学会誌Vol.3、102～108頁、2004
- 2) 宮島幸子、安本義正、高齢者施設の音楽活動・音楽療法実施状況について—音楽療法士養成に関する基礎データ収集：京都府の場合—、近畿音楽療法学会誌Vol.4、83～88頁、2005
- 3) 浄土宗當麻寺奥院・川中光教住職への取材、及び方丈堂出版企画・発行「當麻曼陀羅絵解」（DVD）、同院発行「當麻寺」から「練供養会式」
- 4) 浄土宗誕生寺・漆間斗玖年（徳然）住職への取材、

- 及び同寺発行解説資料「練供養」、テレビせとうち  
クリエイト制作「岡山の祭りと芸能Ⅱ・誕生寺練供  
養」
- 5) 高野山真言宗備前宗務支所長遍明院・黒井泰然住職  
への取材、及び千手山弘法寺跣供養推進協議会編集  
発行「千手山弘法寺跣供養」52頁、テレビせとうち  
クリエイト制作「岡山の祭りと芸能Ⅱ・弘法寺跣供  
養」
- 6) 泉涌寺即成院二十五菩薩練供養の取材、及び即成院  
発行パンフレット「極楽浄土」、2007/10/22付朝日  
新聞、同日付京都新聞
- 7) 大念佛寺二十五菩薩練供養の取材、及び同寺発行パ  
ンフレット「万部おねり」、週刊「朝日ビジュアル  
シリーズ・仏教新発見」・2007年9月16日号・朝日  
新聞社刊
- 8) 京都文教短期大学文化公演会（講演&実演）「當麻  
寺練供養会式（二十五菩薩来迎会）」報告書5～7  
頁
- 9) 同上報告書8頁
- 10) 同上報告書8～9頁
- 11) 同上報告書16頁
- 12) 同上報告書15頁